

【基礎編】第4回 行動を教える技術(プロンプトとシェイピング)

◆ 研修資料(受講者配布用) ◆

1. はじめに: どうすれば「できる」ようになる?

これまでの研修で、望ましい行動を増やすための「強化」の重要性を学びました。しかし、ここで一つの壁にぶつかります。

「そもそも、強化したい望ましい行動が、子どもから一向に出てこない場合はどうすればいいの?」

例えば、「ありがとう」と言ってほしいのに、子どもが全く言わない。このままでは、褒めてあげる(強化する)機会が永遠に訪れません。

このような時に使うのが、新しい行動やスキルを教えるための積極的な技術です。今回は、子どもが成功体験を積みながら、着実に「できる」ようになるための2つの強力なテクニック、「プロンプト」と「シェイピング」を学びます。

2. プロンプト:「できた!」を導く優しい手助け

- プロンプト(Prompt)とは?
 - 子どもが課題を正しく遂行できるように、支援者が行動の前や行動の最中に与える「手助け」や「ヒント」のことです。
 - 目的:子どもの間違い(エラー)を最小限に抑え、成功体験を確実に作ること。成功した直後にすかさず褒める(強化する)ことで、学習のスピードを格段に上げることができます。
- なぜプロンプトが重要か?
 - 「間違い → 叱られる/訂正される」という経験は、子どものやる気を削いでしまいます。プロンプトは、この負の学習サイクル(エラーレス・ラーニング)を防ぎます。
- プロンプトの種類(手厚い順)

プロンプトには、手助けの度合いに応じて様々な種類があります。これを「プロンプトの階層性」と呼びます。

 -

種類	説明	具体例(「おかたづけ」で箱にブロックを入れる場面)
① 身体プロンプト(フルプロンプト)	手取り足取り、子どもの体を動かして行動全体を補助する。最も手厚い手助け。	支援者が子どもの手に自分の手を重ね、ブロックを掴ませて箱まで運び、入れさせる。
② 部分的身体プロンプト	肘や背中を軽く押すなど、行動のきっかけを少しだけ身体的に補助する。	子どもがブロックを持ったまま止まっていたら、肘を「トン」と軽く押して箱の方向へ促

		す。
③ モデルプロンプト	支援者が「こうやるんだよ」と、正しい行動を見本としてやってみせる。	支援者が子どもの前で、ブロックを一つ拾って箱に入れてみせる。
④ ジェスチャープロンプト	指差しや身振りで、次に何をすべきかヒントを与える。	支援者が、ブロックと箱を交互に指差して、行動を促す。
⑤ 言語プロンプト	「～してね」という直接的な指示や、「次は何だっけ？」のようなヒントを言葉で与える。	「ブロックを箱に入れてね」と言う。または子どもが止まっていたら「どうぞ」と声をかける。
⑥ 視覚プロンプト	写真や絵カード、文字などで、やるべきことを視覚的に示す。最も自立に近いヒント。	箱の上に、ブロックを箱に入れている写真カードを貼っておく。

- 最重要ポイント: フェイディング (Fading)
 - フェイディングとは?: 子どもがスキルを覚え始めたら、プロンプト(手助け)を徐々に減らしていくことです。
 - なぜ必要?: フェイディングをしないと、子どもが「プロンプト待ち」の状態になり、自発的に行動できなくなってしまいます(これをプロンプト依存と言います)。私たちの最終目標は、あくまで子どもの自立です。
 - 方法: 基本的には、手厚いプロンプトから、よりヒントの少ないプロンプトへと段階的に移行していきます。
 - (例) 身体プロンプト → モデルプロンプト → ジェスチャープロンプト → 自立!

3. シェイピング: 「小さなできた!」を繋いで大きな目標へ

- シェイピング (Shaping)とは?
 - 目標とする行動(ターゲット行動)を、達成可能な非常に小さなステップ(スマールステップ)に分解し、目標に少しでも近づく行動が見られたら、それをすかさず強化していく方法です。
 - 日本語では「行動形成法」や「逐次近似法」と呼ばれます。
- どんな時に使う?
 - 目標とする行動が複雑な時。(例: 靴紐を結ぶ、長い文章を話す)
 - 子どもが、その行動を全く自発的に行わない時。プロンプトを使っても難しい時。
- シェイピングの進め方

1. 最終目標を明確にする:どこまでできたらゴールかを決める。
 - (例)自分の名前「やまだたろう」と、はっきり発音できるようになる。
 2. 出発点となる行動を見つける:今、子どもができている、目標に少しでも関連する行動。
 - (例)「あー」「やー」など、何らかの声を出せる。
 3. スモールステップの計画を立てる:出発点からゴールまでの道のりを細かく分解する。
 - (計画例)
 1. 「や」と聞こえたら強化
 2. 「やま」と聞こえたら強化
 3. 「やまだ」と聞こえたら強化
 4. 「やまだたろー」と聞こえたら強化
 4. 計画に沿って強化していく:一つのステップをクリアしたら、次のステップの行動が出た時だけ強化するように、基準を少しづつ上げていきます。
- シェイピングのコツ
 - 焦らないこと:一つのステップで十分な成功体験を積ませることが重要です。
 - ステップを細かくしすぎない／大きすぎない:子どもの様子を見ながら、ステップの大きさを調整します。
 - プロンプトと組み合わせる:シェイピングの各ステップで、モデルプロンプト(「やま」と言ってみせる)などを組み合わせると、より効果的です。
-

◆ 講師用原稿 ◆

(スライド1: タイトル)

「皆さん、こんにちは。研修第4回を始めます。前回は、子どものやる気の源泉である『強化子』を、フリーオペラント観察で見つけ出す方法を学びました。

これで、『ABC分析』で行動を理解し、『強化』で行動を増やし、『強化子』を見つける、というABAの基本的な道具が揃いました。今日は、それらの道具を使って、新しいスキルを『教える』ための具体的な技術を学びます。」

(スライド2: はじめに) 10分

「皆さんのがこれから現場で向き合うのは、『どうやったらこの子に、このスキルを教えてあげられるだろう?』という場面です。そして、ただ待っているだけでは、子どもはなかなか新しい行動を獲得できません。

かといって、無理やりやらせて『できない!』という失敗体験をさせてしまうのは、もっと良くありません。子どものやる気も、私たちとの信頼関係も損なわれてしまいます。

今日学ぶ『プロンプト』と『シェイピング』は、こうしたジレンマを解決し、子どもに『できた!』という最高の強化子をプレゼントするための、積極的で、ポジティブな教育技術です。」

(スライド3: プロンプトとは?) 25分

「まず一つ目の技術、『プロンプト』です。日本語で言うと『手助け』や『ヒント』ですね。

プロンプトの最大の目的は、スライドにあるように『エラーレス・ラーニング(誤りなし学習)』を実現することです。子どもが間違える前に、そっとヒントを出して成功に導き、すかさず『できたね!』と褒めてあげる。この成功体験のシャワーが、子どもの『やってみよう!』という意欲を育てます。」

(スライド4: プロンプトの種類)

「プロンプトには、このように手厚さのレベルがあります。(スライドの階層を一つずつ説明していく) 例えば、『手を洗う』という一連の行動を教える場面を想像してください。

蛇口をひねれない子には、手を添えて一緒にひねる『身体プロンプト』が必要です。

蛇口はひねれるけど、次に石鹼を取るのを忘れてしまう子には、石鹼を指さす『ジェスチャープロンプト』が有効かもしれません。

このように、子どものスキルレベルや、課題のどの部分でつまずいているかを見極めて、『成功のために必要最小限な、最もヒントの少ないプロンプトはどれか』を考えるのが、私たちの専門性です。」

(スライド5: フェイディング)

「そして、プロンプトを教える上で、一番と言っていいほど重要なのが、この『フェイディング』、つまり『プロンプトを消していく』作業です。

(問い合わせ)もし、フェイディングをしないと、どうなってしまうと思いますか?... そうですよね、子どもはいつまでも『ヒント待ち』『指示待ち』になってしまいます。これでは自立には繋がりません。

私たちの仕事は、手厚いサポートで成功体験を作りあげ、自信がついた頃合いを見計らって、そつと手を放し、一人で歩いていけるように見守ることです。プロンプトは、あくまで自立のための一時的な『補助輪』なのだと、常に意識してください。」

(スライド6: グループワーク) 25分

「では、皆さんにプロンプトのフェイディング計画を立ててもらいます!」

「(ワーク)課題は『カップで水を飲む』です。まだ一人でカップを持てない子がいるとします。この子に、最終的に一人でカップを持って水が飲めるように、プロンプトのフェイディング計画を立てください。身体プロンプトから始めて、どのようにヒントを減らしていくか、具体的なステップをグループで考えてみましょう。(10分程度)」

「(発表後)…素晴らしい計画ですね！『最初は手を添えて口まで運ぶ(身体)』→『次は手首を支えるだけにする(部分的身体)』→『カップを指さすだけにする(ジェスチャー)』→『最後は「どうぞ」の声かけだけ(言語)』という流れ、非常にスムーズです。このように、ゴールまでの道のりを具体的にイメージすることが、一貫した支援に繋がります。」

(スライド7:シェイピングとは?) 30分

「二つ目の技術は『シェイピング』です。プロンプトが『補助輪』だとしたら、シェイピングは『粘土細工』のイメージです。まだ形になっていない粘土(行動)を、少しずつ目標の形に近づけていく、より創造的なアプローチです。」

「シェイピングは、発語を促す時などによく使われます。

(スライドの発語の例を説明しながら)

いきなり『やまだたろうと言いなさい』と言っても、言えるはずがありません。でも、『や』という音なら出せるかもしれない。その『今できること』を見つけて、すかさず褒める(強化する)。そして、『や』が安定して言えるようになったら、今度は『やま』が言えた時だけ褒めるように、少しだけ基準を上げる。この繰り返しです。

子どもからすれば、自分のできることをしているだけで、どんどん褒めてもらえる。そして気づいたら、前はできなかった難しいことができるようになっている。これがシェイピングの魔法です。」

(スライド8:まとめ) 10分

「本日は、新しい行動を教えるための2つの重要な技術、『プロンプト』と『シェイピング』を学びました。

この2つの技術に共通するのは、子どもの『できないこと』を責めるのではなく、『今できること』から出発して、スマールステップで成功体験を積み重ねていくという、非常にポジティブな視点です。」

「現場では、『これはプロンプトかな? シェイピングかな?』と難しく考えすぎる必要はありません。大切なのは、『この子がつまずいているのはどこか?』『成功するためには、どんなヒントや手助けがあればいいか?』と常に考え、子どもの自立に向けた『補助輪』や『粘土細工』を工夫し続ける姿勢です。」

「次回は、多くの支援者が悩む『問題行動への対応』について、これまで学んだABAの知識を総動員して考えていきます。今日の学びが、その土台となります。何か質問はありますか?(質疑応答)…それでは、本日の研修はこれで終了です。お疲れ様でした。」